

正岡子規『竹乃里歌』短歌の色彩語について

石井翔子

一、短歌の色彩語について

本稿では、正岡子規（一八六七～一九〇二）の短歌作品に使用された色彩語について見てゆく。子規短歌に用いられている色彩語について、長谷川孝士氏に次の指摘がある。

この傾向（白い色との「配合」「対照」において赤が美しく生きるといふ傾向）は短歌にも表れている。……赤・紅系統の色彩語使用のもの六十一首。そのなかの十三首を除いた四十八首は、全て植物の色、つまり「天然の色」の赤である。そしてそれらの多くは、……青・白・紫・黄など他の色との配合によるのが子規の特色と言える。

管見の限り、子規短歌にみられる色彩については、「赤・紅系統」のものを中心に言及されている。実際に子規短歌には「赤・紅系統」の色を示す語の使用が多く見られる。しかし、白や緑、

紫などの他の色も積極的に詠まれており、他の系統の色彩についても調査の余地が残されている。

そこで本稿では、子規の短歌作品の中で色彩の表現が明確になされているものを対象に、子規がどのような色を短歌に詠んでいるのかを調査し、その特徴を明らかにしたい。

短歌革新前の明治三十年以前の作品には白系統の色彩語の使用が多く見られるが、短歌革新を発表した明治三十一年を境に白系統の色よりも赤系統の色の方が多く見られるようになる。また明治三十一年から三十三年までの作品では詠まれる色の種類が多い。例えば茶、灰色の系統の色彩語を詠むのはこの期間だけである。明治三四年以降になると詠まれる色は赤や紫など限られたものとなる。このような変化についての考察を行い、子規短歌に見られる色彩語の特徴を見てゆく。

短歌の語彙の採録は次の三点で行う。調査対象とする短歌は、作歌時期が分かる二四三二首とする。

- 1 自筆本『竹乃里歌』の複製本（講談社 一九七六年九月六日）
- 2 講談社版『子規全集 第六巻』収録『竹乃里歌』と「竹乃里歌」拾遺（一九七七年五月十八日）
- 3 正岡子規自筆『竹乃里歌・竹乃里歌拾遺』語彙総索引稿（金子彰・石井翔子編 私家版）

色彩語の採録方法は次の通りである。

『竹乃里歌・竹乃里歌拾遺』語彙総索引稿に収録されている名詞と形容詞の中から、「赤」や「白し」など色を表すものを色彩語として採録する。また「赤薔薇」など一部に色を示すものが含まれているもの、「色」「斑」など色の存在を示すものの何色か明らかでない語も色彩語とする。なお本稿では、「雪」など色彩が明らかな語彙であっても、色を示すものが含まれていない語彙は色彩語としない。

二、各期間の色彩語の変化と特徴

色彩語の詠まれている子規短歌は三四四首であり、その中で何色であるのか明らかなものは三二六首である。

子規の作歌時期を六つ（短歌革新発表前の期間、革新を発表し

た年の明治三一年、それ以降の各年）に分け、各時期の色彩語の用いられている作品の数を次に挙げる。作品数の下に挙げた割合は、各期間に作られた全作品数に対するものである。

明治三十年以前	：	七四首（約一・三割）
明治三一年	：	九九首（約一・四割）
明治三二年	：	三三首（約〇・九割）
明治三三年	：	一一三首（約一・八割）
明治三四年	：	十五首（約一・七割）
明治三五年	：	十首（約一・九割）

色彩語の詠まれている作品数とその割合について、その増減を見ると、明治三二年の短歌革新を境にした大きな変化は見られない。

明治三四年と三五年が最も高い割合となっている。この期間は、子規が絵を写生することに関心が向いている時期と一致する。

このことから、短歌に色彩語を詠み込むことの多少は、革新の理論よりも当時の子規の興味によるものの方が、強く関わっているといえる。

色彩語の使用の多少については、短歌革新を境にした変化は殆ど見られないが、詠まれた色についてはどうであろうか。

そこで、子規短歌に見られる色彩語を具体的に見てゆく。

次に、子規短歌に見られる色彩語を色の系統^{注3}ごとにまとめたも

のを挙げる。

色彩語の挙げ方について、赤、茶、黄、緑、青、紫、白、黒、灰色の各系統に分類した語を、更に複合語か否かなどのグループごとに分けて挙げた。そのグループごとに、それぞれ該当する一首を付す（該当する語には《》を付した。また歌の下に作品の通し番号と作歌年を記す）。なお、その歌は各グループで最も早い時期に作られた作品である。

赤系統 異なり語数…三八 作品数…一二四首

〔赤〕〔赤し〕

《赤き》牡丹白き牡丹を手折けり《赤き》を君にいで贈らばや

(三四二・三一年)

〔赤〕の入った複合語

(赤紙・赤染・赤玉・赤椿・赤薔薇・赤斑・赤裳・赤百合の花・赤の強飯・薔薇の赤花・真赤)

たま／＼に窓を開けば五月雨にぬれても咲ける《薔薇の赤花》

(六九三・三一年)

〔紅〕〔くれなゐ〕〔紅の色〕〔紅(へに)〕

夜をこめて熊やみつらん《くれなゐ》の血しほ花ちる雪の曙

(二六五・二六年)

〔紅〕の入った複合語

(紅の葉・紅梅・薄紅葉・紅粉・紅たけ・紅葉・紅葉が谷・紅葉す・紅葉の枝・紅葉の梢・紅葉の錦・紅葉葉)

のこすともつゝに散るへきものならは

《紅葉の錦》我も手折らん (拾遺一二三・二二年)

〔朱〕の入った複合語(朱の忌垣・朱の欄)

千年ふる《朱の忌垣》に苔蒸して賀茂の社は神さひにけり

(八六九・三一年)

〔丹〕

黄金塗り《丹》ぬり青ぬる御靈屋の

鳥居うつめて花さきにけり (二六四一・三三年)

〔丹〕の入った複合語(丹塗り)

龍ノ住ム青垣淵ノ岩ノ上ニ高ワタシタル《丹塗》神橋

(一八三〇・三三年)

〔緋〕

芭菊の黄も《緋》も白も眞盛りに

咲ける君か代まさきくありませ (二〇一四・三一年)

〔緋〕の入った複合語(緋桃)

朝晴に花賣る人と呼び入れて《緋桃》を買はず連翹を買ふ

(一〇九五・三二年)

「真緒」

《マソホ》塗り青土色^{アツニ}ドル御魂屋ハウツ、二見タル極樂浄土

(一八三五・三三三年)

「ルビー」

格堂は《ルビー》か巴子はトパツツがあるじ麓は出雲青玉

(一八二一・三三三年)

「薄紅」

草の戸にまつる阿彌陀の御佛に《薄紅》の梅奉る

(二四五七・三三三年)

「薄紅」の入った複合語（薄紅梅）

雨乾く《薄紅梅》の夕日影又照り返すカナリヤの籠

(四三三・三一年)

子規短歌に用いられている色彩語の中で、赤系統の色を表すものの異なり語数は三八であり、白系統のものと同じく最も多い。

また赤系統の色彩語が詠み込まれた作品数は一二四首であり、色系統別の作品数の中で最も多い。

短歌革新を唱える前である明治三十年以前の作品では、赤系統の色を表すのに「紅」のみを用いているが、三一年以降になると「紅」に加え、「赤」「朱」「丹」「緋」など赤系統の色彩語の種類が増えている。これは、読み手に対して短歌に詠み込んだ事物をよ

り明瞭に伝えようとする子規の姿勢が表れていると言える。

茶系統 異なり語数：五 作品数：六首

「茶」の入った複合語（茶藨）

しばし住むめのとの宿は山近み

ともしくもあらず《茶藨》黒藨 (七六八・三一年)

「赤土」

此阪は悪き坂なり《赤土》に足すべらせそ我をこかしそ

(一二五二・三三二年)

「澁色」

から酒に蟹ひてありし《澁色》の低き小瓶に梅を活けたり

(一五五三・三三三年)

「月毛」

なまよみの甲斐の黒駒久方の《月毛》の駒とあひいはえつ、

(五一・三一年)

「黄屎」

緑羽ノ蠅ノミコトガ蠅ツドヒ《黄屎^{クバツ}》ノ饗^ミラクコシラス見ユ

(一八六二・三三三年)

茶系統を表す色彩語は、明治三十一年から三三年までの作品に見られる。作品数が五首と少ないこと、明治三四年以降には詠まれ

ないことから、茶系統の色は、子規にとって積極的に表現するものではなかったと言える。

【黄系統】 異なり語数：十 作品数：十四首

【黄】「黄色」

芭菊の《黄》も緋も白も眞盛りに

咲ける君か代まささくありませ (二〇一四・三一年)

【黄】の入った複合語(黄菊・黄玉)

賣れ残る《黄菊》白菊積みあげて

歸る車や大路小路の霜 (二〇一〇・三一年)

【トバツツ】

格堂はルビーか巴子は《トバツツ》か

あるじ麓は出雲青玉 (二八二・三三年)

【黄金】

吾妻橋《こかね》のはしらくつるとも

誓かはらしいも我との (拾遺九八・二一年)

【黄金】の入った複合語(黄金の太刀・黄金の波・黄金花)

さきいづる心もあやし草の家に《こかね花》ちる垣の山ふき

(一四七・二四年)

【金】の入った複合語(金地)

團扇めせ水團扇めせ絹團扇《金地》銀地の團扇めさすや

(七四八・三一年)

黄系統を表す色彩語は、短歌革新発表前から使用されている。明治三十年以前では「黄金」と表現するのみであったのが、明治三十一年以降は「黄」「金」「トバツツ」と表現が広がっている。

子規短歌での黄系統の色彩語は、明治三十一年以降の作品では、他の系統の色彩語との組み合わせ(例えば「緋」「白菊」「銀地」など)で詠まれることが多くなる傾向が見られる。

【緑系統】 異なり語数：三三 作品数：五十首

【緑】「緑す」「緑立つ」

足引の山は《緑》に賤か家の卯の花白しなけ郭公

(二二四・二五年)

【緑】の入った複合語(深緑・緑の陰・緑羽・若緑)

浅からぬ根さしも見する《深緑》思ましの池のあやめは

(拾遺三四・十八年)

【青色】「青青」^{注4}「青し」

官人の驢馬に鞭うつ影もなし金州城外柳《青々》

(四四一・三一年)

「青」の入った複合語

〔青垣・青垣山・青蛙・青草・青田・青畳・青菜・青菜の花・青葉・青銚・青松・青麦・青芽・青柳・青山・梅の青葉・翠簾〕

夏されは《青葉》はかりの庭の面に花とまがへて飛ぶ螢かな

(一七七・二四年)

「青丹」

マソホ塗り《青土》^{アヲニ}色ドル御魂屋ハウツ、二見タル極樂浄土

(一八三五・三三年)

「緑青」

《緑青》を塗りたる山の裾山にべにをときたる紅葉散るなり

(一二七五・三二年)

「萌黄」

朝な夕な字書きふみ讀むかたはらに

《萌黄》の鳥の木にとまり居り (一五四八・三三年)

「常盤」

苔清水むすふはかりもす、しきにこゝは《常盤》の松の下陰

(十五・十八年)

「常盤」の入った複合語(常盤木・常盤の松)

なやむまでふりぞまされる白雪に

《常盤の松》も今やくたけん (八八・十九年)

緑系統の色彩語は、「緑」を用いるより「青」を用いた表現が多く見られる。歌材とする緑色の事物が植物であることが殆どであり、「青葉」や「青田」など「青+植物や土地」の形で植物の状態、または植物が茂っている状態を表すことができるためであると考えられる。

明治三十年以前でも「深緑」とどの様な緑色であるのかより具體的になっている例もあるが、明治三二年と三三年では「青丹」「緑青」「萌黄」と少し緑色の種類が増えている。

青系統

異なり語数：九語 作品数：十五首

「藍」

暁ノオキノスサミニ筆トリテ繪ガキシ花ノ《藍》薄カリキ

(一八七五・三三年)

「青」「青し」

天津橋上繁華の子等の見えしより天津橋下春の水《青し》

(三五八・三一年)

「青」の入った複合語(青海原・青空・青鳥・青蠅・出雲青玉)

天つ空《青海原》も一つにてつらなる星かいさりする火か

(二四一・二六年)

〔水色衣〕

妹が着る《水色衣》の衣裏の薄色見えて夏は来にけり

(一七〇七・三三年)

青系統の色彩語は明治三三年の作品で、他の期間と比べて多く見られる。明治三二年までは、海や空といった自然や蠅といった動物に対して青色を表していたが、三三年では、絵や玉、衣など人工物に対しても表現するようになっていく。しかし明治三四年以降では全く青系統の色彩語が使用されておらず、子規にとって青色は積極的に短歌に表現する色ではなかったと考えられる。

〔紫系統〕

異なり語数…七

作品数…二五首

〔紫〕

《紫》の絲よりかくる萩か枝におきあまるまで結ふ露かな

(拾遺七二・二二年)

〔紫〕の入った複合語(薄紫・濃き紫・紫雲・花紫・紫の雲)

日のさ、ぬおどろがもとの花重《薄紫》に咲きにけるかな

(五〇二・三一年)

〔薄色〕

《薄色》の潮あみ衣風になひき小磯に歸る妹今日も見つ

(七二七・三一年)

紫系統の色彩語は、明治三十年以前から没年である三五年までの期間を通して、短歌に詠まれている。

明治三一年と三三年では紫色であると表現する対象が、団扇や衣、雲と広がり、紫系統の色彩語の使用が増えている。しかし明治三四年では藤、三五年では菫にと、紫色であることを表す対象が狭まっている。

〔白系統〕

異なり語数…三八

作品数…一〇三首

〔白〕「白し」「白み」

昔見しいもかあらぬかあれまざる

檐端に《白き》花のゆふがほ

(拾遺二二・二四年)

〔白〕の入った複合語

(沖つ白波・白粉・白糸・白糸の滝・白梅・白魚・白菊・白

雲・白砂・白玉・白露・白波・白布・白髭・白斑・白帆・白

裳・白雪・白木綿・白百合の花・白瓶・白妙・白妙の・白薔

薇・露の白玉・白梅^(はくばい)・花の白雲・真白斑・真白・疎ら白梅)

夕されは東の峯に月いて、窓にうつれる庭の《白梅》

(拾遺四・十五年前)

〔乳の色〕

砥部焼の《乳の色》なす花瓶に梅と椿と共に活けたり

「銀」の入った複合語（銀地・銀泥・白銀）

（二四三七・三三年）

團扇めせ水團扇めせ絹團扇《金地》《銀地》の團扇めさすや

（七四八・三一年）

「白金」

黄金ノベ《白金》ノベテ造リタル二荒御魂屋今日見ツルカモ

（二八二八・三三年）

白系統の色彩語の異なり語数は三八であり、最も多い数値である。異なり語数が多くなつたのは、「白玉」や「白百合の花」など「白（＋の）＋名詞」の形の複合語が多かつたためである。白の色の表現の区別は、「白」「乳」「銀」であり、他の色と比べ多様であると言えない。

白色を色彩語で表現している作品数は、赤系統のものに次いで多い。ただし他の色系統の場合とは異なり、最も多い例を見ることのできるのは明治三十年以前の期間である。

「黒系統」

異なり語数：十四

作品数：二九首

「黒し」

なにしおふすみ田の川の川波の

「黒」の入った複合語

にこりて《黒し》さみたれの雨

（拾遺四一・二二年）

（黒石・黒髪・黒首・黒雲・黒毛・黒子・黒駒・黒萱・真黒・黒焼き）

葉ばかりを《黒髪》と見て姥櫻かしらにかざる花の白雪

（拾遺一八五・二三年）

「墨」

《墨》さびし墨繪の竹の茂り葉の垂葉の下に梅いけにけり

（一四五四・三三年）

「墨」の入った複合語（墨染）

何とはなしに鐘の音かなし《すみ染》の

袖にもけふは秋やたつらん

（拾遺七〇・二二年）

「墨黒」

夕顔の實の太けくに《墨黒》に目鼻をか、ば人とならんかも

（拾遺四四四・三四年）

黒系統の色彩語は、明治三三年に最も多く詠まれている。

明治三十年以前と三一年の間に作品数の変化は殆ど見られないが、黒系統の色彩語の詠み方に変化は見られる。黒色を他の色と組み合わせる場合、明治三十年以前の作品では白系統の色のもの（白雪）など）のみであるが、三一年以降の作品では白色以外の

もの（「紅蕚」や「茶蕚」など）も一緒に詠まれるようになる。

【灰系統】 異なり語数…三 作品数…三首

【青煙】

おくつきにそなへし花の古花を集めて焼けば《青煙》立つ

（二七八六・三三三年）

【葦毛】

群れ走るる《葦毛》月毛の駒の尾に

春風吹きて御代しつかなり （二〇八〇・三三二年）

【鈍色】

同じ鉢に眞白《鈍色》うちまぜて三つ四つ二つ咲ける朝顔

（九二九・三三一年）

灰系統の色彩語の使用は少なく、短歌に詠み込まれるのも明治三一年から三三三年までと限られた期間である。これまでの色系統の中で最も表現されることのない種類である。

以上、各系統の色彩語について、異なり語数は多いのは複合語が多いためであり、実質的には色彩の種類は決して多いものではないことが明らかである。

子規が作った語彙集「たね本」の「色彩」の項目に挙げられて

いるものと比較しても、短歌に詠まれる色彩語の種類は決して多くはないといえる内容であった。

例として子規短歌と「たね本」のそれぞれに見られる赤系統の色彩語を挙げる。（一）内にはそれぞれの色の種類に入れた語例である。

子規短歌 「赤（赤・赤し・赤紙などの複合語）」「紅（紅・

紅の色・紅葉等の複合語）」「朱（朱の忌垣・朱の

欄）」「丹（丹・丹塗り）」「緋（緋・緋桃）」「真緒」

「ルビー」「薄紅（薄紅・薄紅梅）」

「たね本」 「赤（赤・眞赤）」「紅（紅・深紅）」「朱」「丹」「緋」

「猩々緋」「茜（茜・茜染）」「薄紅」「薄赤」「桃

（桃・桃色）」「櫻（櫻・櫻色）」「薄桃色」

「たね本」に見られるもので子規短歌に用いられていない種類の色は、「猩々緋」「茜」「薄赤」「桃」「櫻」「薄桃色」である。

今回の分類の場合、植物の「桜」や「桃」は色が明記されていないとして色彩語に採録していないが、やはり「たね本」と比べると色の種類は少ないと言える。

ただし、このような「たね本」に見られる語彙が短歌作品に見られないという例は、「人倫」や「植物」、「器物」など項目に見ら

れるものであるので、色彩語に限ったものとは結論付けられない。

三、期間ごとの色彩語の特徴

各期間の色彩語の変化、特徴を見てゆく。次の頁に、各系統の色を使用した作品数を、各期間でまとめた表を挙げる。

作品数	30 年以前	31 年	32 年	33 年	34 年	35 年
赤系統	13	41	22	36	6	6
茶系統	0	2	2	2	0	0
黄系統	3	4	0	5	1	1
緑系統	8	19	5	17	1	0
青系統	1	4	2	8	0	0
紫系統	2	7	2	8	3	3
白系統	39	24	3	35	2	0
黒系統	7	8	2	11	1	0
灰系統	0	1	1	1	0	0

明治三十年以前の作品について、色彩語が用いられた作品は七十四首である。ここで用いられている色彩語は、白系統が特に多い。

この期間では、色彩語で表現される対象は、「白梅」や「紅葉」などの植物が最も多く、「白露」「白雪」といった自然現象や気象によるもの、「白浪」「白帆」など外出先で見られる自然物や人工物も多い。

歌語には「白露」のような「白」を用いた複合語が多く、この期間の子規の歌風が古典和歌の影響が強いことを考えると、白系統の色彩語が多くなるのは必然的なものといえる。

明治三十一年の色彩語が用いられた作品は九九首である。

この期間では、全ての系統の色の使用が見られ、特に赤系統、白系統、緑系統の使用が多い。特に赤系統への偏りが大きくなり、白系統の使用が減少し始めている。

色彩語で表現される対象には、「紅梅」「白梅」「青葉」など植物が最も多い。前期間と変化した点は「黄金の太刀」などの人工物や、「白斑の鷹」などの動物を対象とすることが増えたことや、「白き酒」「黒き豆腐」といった飲食物を対象とし始めたことである。

また、短歌革新前に多く詠まれていた自然現象や気象によるものや、外出先の自然物を対象とすることが減少している。特に「白露」や「白雪」といった「白」の用いられた複合語が少なくなっ

ている。

明治三十一年発表の「七たび歌よみに與ふる書」では、趣向が陳腐にならないよう用語を拡大することが唱えられている。^{注6}

…故に趣向の變化を望まば是非とも用語の區域を廣くせざるべからず、用語多くなれば従つて趣向も變化可致候。…

用語の區域を広げることが、歌の題材の広がりにも繋がる。

子規はこの理論を実践し、明治三十一年の短歌作品では前期間のものよりも、詠まれる題材が大きく増加している。色彩語で表現される対象についても、「紅梅」はこの年から詠まれるものであるし、人工物についてもこの期間を境に積極的に詠まれるようになる。

また明治三十一年は、子規が短歌革新を発表した年である。短歌革新で唱えた理論は、先に行つた俳句革新の理論、写生を俳句に用いることを短歌にも応用したものである。

子規は「明治二十九年の俳句界」にて、次のように述べている。^{注7}

…印象明瞭といふことは繪畫の長所なり。俳句をして印象明瞭ならしめんとするは成るべくたけ繪畫的ならしむることなり。…

「雪」などは色が何であるのか明白であるが、「鷹」や「緒」など様々な色が考えられるものに対して、その色を明示すること

で、その作品全体の印象をより明瞭にすることができているのではない。歌に詠む題材が豊富になつたため、この期間での色彩の種類が増加したと考えられる。

また歌の題材とするのは詠み手の「美」の感覚によるものとしている。「十たび歌よみに與ふる書」に次のようにある。^{注8}

…只自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。

子規が幼いときより好んでいた赤色に「美」を感じることが多かったため、赤系統の色彩語が特に多く見られたと考えられる。

明治三二年の色彩語が用いられた作品は三三首である。その色彩語は、赤系統の色彩語への使用に偏っている。

色彩語で表現される対象について、明治三十一年に見られる傾向とはほぼ同じであつた。

明治三三年の色彩語が用いられた作品は一一三首である。この期間でも、明治三十一年と同様に全ての系統の色が用いられている。

明治三十一年と異なるのは、明治三十一年から見られた赤系統の使用への偏りがなくなり、白系統も多く使用されるようになっていく。また他の系統の色を表す色彩語も使用を増やしている。

この期間の色彩語が表現する対象は、「赤薔薇」など植物が多多いのはこれまでの期間と共通している。但しその偏りは小

くなっている。

明治三十二年十二月に子規の臥している部屋の障子がガラス張りになった。そのため子規は部屋にいながらにして外の様子をうかがうことが可能になった。このような環境の変化によるものか、「青松」の「白露」や「青空」など赤系統以外の色彩を持つものを題材にする割合が増えている。

またこれまでの期間では色彩語で表現される対象となっていた、山海などの外出先で目にする自然物を対象とすることが減少している。「青き麦生の畑」といった例も見られるが、子規はかつて見た景色を詠むよりも、部屋のすぐ外に見ることのできる庭の景色や、身辺のものを詠むことが多くなっている。

さらに、この期間の特徴として、歌会の様子を詠んだ作品に、参加した歌人の歌風を「赤玉」「出雲青玉」など色彩で表現したものが数首ある。しかし、このような目に見えないものに色をつけて表現することは、この歌会を詠んだ作品群にしかみられず、子規はそのような表現を短歌の表現として確立していない。

明治三四年の色彩語を詠んだ作品は十五首である。

明治三五年の色彩語を詠んだ作品は十首である。

明治三三年以降は、各期間の作品数に対する色彩語を詠んだ作品数の割合が、以前の期間と比べ、多いものとなっている。

明治三四年以降の期間では、子規の興味は絵を描く方に大きく向いている。

或繪具と或繪具とを合せて草花を畫く、それでもまだ思ふやうな色が出ないと又他の繪具をなすつてみる。同じ赤い色でも少しづつ、色の違ひで趣きが違つて来る。いろ／＼に工夫して少しくすんだ赤とか、少し黄色味を帶びた赤とかいふものを出すのが寫生の一つの樂みである。神様が草花を染める時^{注9}も矢張こんなに工夫して樂んで居るのであらうか。

このように子規は対象物を写生するにあたっては、色彩に対して強い意識を向けている。

ところが、明治三四年以降の子規の短歌に見られる色彩は「紅」「黄」「花紫」「墨黒」と色の種類は少なく、また色彩語も、例えば赤系統の色を「赤」「紅」「朱」などと表現を分けることもなくなっている。

これは当時の子規の作歌の姿勢に変化があったためと考えられる。この時期は次にある通り、作歌への意欲が弱くなっている。

次の引用は、「藤」の連作の前に書かれた詞書^{注10}である。

：あやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなり
まさりたればおぼつかなくも筆を取りて

この詞書に続く「藤」の作品群の中に、次の二首がある。

藤なみの花をし見れば《紫》の繪の具取り出で寫さんと思ふ

(拾遺三六六・三四年)

藤なみの花の《紫》繪にかゝばこき《紫》にかくべかりけり

(拾遺三六七・三四年)

この作品群は「歌心」によって作られたものであるが、「藤」の色は「繪」を描くことを前提としたものとなっている。

この時期の子規は色に対して注意深く観察をしており、それを言葉で短歌に再現するのではなく、絵の具を用いて絵で再現することの方が多かったのではないか。

さらに、明治三四年以降の作品は、色彩語を詠んだ作品に限らず、次のように詠まれる題材が庭の植物や鉢植えの梅など身辺のものに限られている。

賤か家の貧しき庭に濡れて立つ雨の牡丹よ傘まゐらせん

(拾遺四三八・三四年)

鉢植の梅はいやしもしかれとも病の床に見らく飽かなく

(拾遺四六四・三五年)

このような歌に詠む題材の限定が、色彩語の内容の減少へ繋がっていると言える。

この二つの期間では、色彩語を詠んだ作品を作る傾向が高く見られたが、それは、明治三四年以降の短歌の作品数(母体数)が

小さかったために、割合が高くてたと考えられる。

四、まとめ

正岡子規の短歌に見られる色彩語について、次のことが明らかになった。

色彩語を用いた作品を作る傾向は、短歌を作り始めた頃から没年まで、それが大きく変化することは見られない。

しかし、短歌革新直後である明治三一年から三三年の間では、短歌の題材を拡大したことで、「印象明瞭」な表現をとったことから、色の種類の増加は見られる。また、色の組み合わせでも「赤」と「緑」といった鮮烈な組み合わせも見られるようになるといった変化も見られる。

明治三三年では子規の置かれる環境の変化が、色彩語の使用に影響を与えている例を見ることができる。ガラス越しに外の様子を見ることができるようになったためか、「青空」といった実際に目で見ることでできる自然物の色を詠んでいる。

明治三四年、没年である三五年の子規は短歌創作の意欲は、以前よりも薄れ、絵を描く方に興味が大きく向いている。また歌に詠む題材が身辺のものへと限られていったことによる、色彩語の内容も、青系統の色が詠まれなくなる等といった減少が見られる。

このように子規短歌の色彩語は、子規の短歌に対する考え方や、置かれた環境、作歌への意欲の影響を受けており、その色彩の内容は作歌時期ごとに特徴が見られる。

注

注1 『表現に生きる正岡子規』一五五―一五六頁（長谷川孝士 新樹社 二〇〇七年九月一日）

注2 長谷川氏が「色彩語」としたものと、拙稿で「色彩語」としたものと、採録する基準が異なる。そのため、先に挙げた長谷川氏の指摘されている数値と拙稿で示す数値が異なっている。

注3 色の系統の設定、色彩語の各系統への分類には、次の史料を参考にした。

『色名語辞典』（清野恒介、島森功 新紀元社 二〇〇五年七月一日）

注4 緑色を表す「青」は緑系統の色として分類している。例えば「青松」などがその例である。

注5 『子規全集第二十巻研究編著』三八六頁（正岡忠三郎編集代表 講談社 昭和五十一年三月十八日）

「たね本」には俳諧語辞典の性格があるとされるが、全集の解題で「集められた語彙のすべてが作句に必要なものではない」と指摘されている。収められている語彙は、意味分野（植物や器物等）ごとに、または品詞ごとに分類されている。

注6 「七たび歌よみに與ふる書」（『子規全集第七巻歌論選歌』（正岡忠三郎 編集代表 講談社 昭和五十年七月十八日）収録）全集の四十頁より引用した。

注7 「明治二十九年の俳句界」（『子規全集第四巻俳論俳話』（正岡忠三郎 編集代表 講談社 昭和五十年十一月十八日）収録）全集の五〇五頁より引用した。

注8 「十たび歌よみに與ふる書」（『子規全集第七巻歌論選歌』収録）全集の四九頁より引用した。なお引用に際して、右傍に付されていた〇印は省いた。

注9 明治三五年八月八日発表「病牀六尺」（『子規全集第十一巻隨筆二』（正岡忠三郎編集代表 講談社 昭和五十年四月十八日）三四四頁）より引用した

注10 明治三四年四月二八日発表「墨汁一滴」（『子規全集第十二巻隨筆二』（三四四頁）より引用した。

（いしい しょうこ 本学非常勤講師）